

「進路」について考える

校長 松尾 和子

早いもので5月も下旬になり、小中高重複校舎では運動会が行われ、高等部一般校舎では現場実習がスタートしました。

始業式・入学式の際、満開だったサクラの木は、光合成をしようと光を求め、多くの葉は重なり合わないように、それぞれの枝のそれぞれの場所で成長につながる生命のしくみを機能させています。根は生きるために必要な水や無機物を得ようと、しっかりと根を広げています。地中にあるため見えませんが、根も生命のしくみを機能させています。



今回、私なりに「進路」について改めて考えました。「社会」と「人生」の2つの時間軸があり、「社会」は「人生」の環境の一つであると捉えています。

やや古い話になりますが、2011年に米デューク大学のキャシー・デビットソン氏はこの年に小学校に入学した子供たちの65%は今存在していない職業に就くだろう、2013年に英オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン氏は人工知能の発展に伴いなくなる職業があるという見解を示しました。10年以上が経過した今、確かに生成AIやSNSなど急激に私たちの生活を取り巻く環境が変化しました。次の10年は更に加速的に変化することが予想されます。

そのような変化の激しい「社会」の中でも、それぞれの「人生」、生命は揺るがないものとして確立しています。日々の生活の中では気づきにくいかもしれません、小さな変化が積み重なり成長につながります。子供たちの中で興味のあるもの、好きなもの、得意なもの、取り組んでみたいことが増えていき、充実感、達成感から自己肯定感を高め、それぞれの生きる力につながってほしいと切に願っています。

子供たちの「人生」に大きく関わる学校として、本校にある4つの学部・グループの教育目標の中に「できる喜びの積み重ね」「挑戦する」「自律し、自立する」「人とかわりあいながら、自分らしく」という言葉があります。子供たちの将来や進路について、本人の思いや保護者・関係される方々の願いを踏まえながら一緒に考えていきたいと思っています。どのような生活の場があるのか、どのような進路先があるのか、特に高等部になると、より具体的に考えなければならない段階です。現場実習での学びや経験はとても貴重で、新しい発見があるかもしれません。

25年前、ある生徒が福祉関係の仕事をしたいと相談してきました。その時、「福祉」とは何なのかを、生徒と一緒に考えました。「幸せに生きる」という私の考えは、今も変わりません。その当時は、「共生社会」や「インクルーシブ」という言葉や意識はあまり浸透していませんでした。これからは、子供たちの「進路」と共に、支援学校の「進路」についても考えいかねばならないと決意を新たにしたところです。